講演

日本佛教史上の特例

文學博士　村上專精

今晩此會で何か話をするやうにと云ふ仰せでございましたから、不肖ながら出まして諸君の御耳を汚すことになりました。言譯をする樣でございますが、此頃大分忙しうございましたのと、それから天候の具合で腦が少し惡いので、充分なお話が出來るか何うかと自ら案じて居ります次第で、豫め御容赦を願つて置きます。且又私は甚だ記憶の惡い人間であります。歷史と云ふものは記憶が最も必要でありますが、それが記憶の惡い爲めに數字などが出て來ぬと云ふ案じもありますから、是れも前以て御斷り申し置きます。

今日の題は日本佛教史上の特例と云ふことになつて居ります。申す迄もない、世界に佛教が二つある道理はございませぬ。佛教は唯一に相違ございませぬ。併ながら其佛教が諸方に傳播するに付て發育する土地に依つて必ず一種の特色を帶びて發達する。是れは佛教に限らず人事萬端之れに洩れないと思ふ

動物でも植物でも其發育する土地の關係上一種の特色を帶びる。松なら松でも、技振の具合まで發育する土地に依て違ふ。海中に育つ所の魚類でも、陸上に居る所の牛馬の如きでも皆然うである。釋迦一人の說かれた佛敎が世界に弘まつたのであるから凡ての佛敎、其本は一つである。一つであるけれどもそれが諸方に傳播して、支那では支那の土地に相應して發達し、日本へ來ては日本の土地に相應して發達して居ると云ふことは萬已むを得ぬ話であります。

第一　推古朝史と明治史との對照

此題で御話する順序として御參考に申さなければならぬことは、推古朝史と明治史との對照と云ふことであります。是れは兩者對照して見ると、餘程面白い對照が出來るやうに思ふのであります。日本の文明史と云ふものを大に別けたならば、私は之を前期と後期とに別けても宜からうと思ふのであります其前と云ふものは太古から明治以前迄である。明治で文明の輸入が變化した。明治以前の文明は支那から持つて來た。それが明治に至つて一變して之を西洋から持つて來ることになつた。それは明治以前にも徐々として歐羅巴の文明が來るは來ましたけれども、維新と同時に俄に關門が開けたやうな具合で、一時に西洋の文明が這入つて來た。それは太古に遡つて見ると推古朝以前に漢土の文明が漸を以て來ましたけれども、推古朝になると同時に、卽ち推古天皇が御卽位になり聖德太子が攝政に御成り遊ばした時に、恰も明治維新になつて歐羅巴と交通の關門が開けた樣に、大陸と日本との交通の關門が開かれた

やうな工合になつて居ると思ひます。それで推古朝に於て大陸の文明輸入の關門が開かれたのと、明治維新に於て西洋文明の輸入の關門が開かれたのと照合して見ると大に似て居る。さうして一方は西洋、一方は支那、此違ひがあります。

明治になつて四十五年間の文明史と云ふものは大層長いことであるが、其中心となる處は何處であるかと云ふと、それは明治二十二年の憲法發布であらうと思ひます。斯う云ふことは法律學者の研究することであつて私には不得意なことでありますけれども、私の考では此四十五年間に數へられない程澤山ある明治天皇の御事業の中心となつて居る所のものは憲法發布と見なければならぬと思ふ。所が、其憲法發布は何が本になつて起こつたかと云ふと、憲法發布の因つて來る本は五箇條の御誓文である。五箇條の御誓文が出てから憲法發布になるまで二十二年の月日を經て居りますが、其五箇條の御誓文は何が本を爲して居るかと云ふと、それには嘉永六年にペルリが日本に來たことが其淵源ではないか。卽ち嘉永六年のペルリの渡來と、五箇條の御誓文の仰出と、憲法發布と、此三階級に因つて今日の日本が出來たものであります。

明治の歷史を假に然うしますと、一方推古朝の歷史も亦三階級を爲して居るのであります。推古朝の六年に聖德太子が勅命を奉じて宮中で勝鬘經の講義をなさつた。今日たゞ講釋をなさつたと云ふと何だか一冊の書物の講釋があつた樣に思はれるが、そんな簡單なものでない。あの時代に遡つて考へますと

太子が勅命を奉じて宮中に於て勝鬘經の講釋をなさつたと云ふことは確に大陸の文明を日本に輸入されることになつた儀式であつたと見てよい。憲法發布は明治年間に於ける一番の大典である。其時には御承知の通り明治天皇は百官群臣列席の上で式を擧げられて居る。推古朝の出來事で見ると、聖德太子が勝鬘經の講釋をなさつたと云ふのが非常な大典であつて丁度憲法發布式に似寄つたものと見てよいと思ふのは其時にも天皇躬ら百官群臣は申す迄もなくあらゆる皇族方、御姫樣方、群臣、公民に至るまで悉く召されて式を行はれたのであります。無論今日とは違ひ萬事開けぬ時代でありましたから簡單であつたには相違ないけれども、之を明治の歷史から推測したならば實に日本空前の大典が行はれたのでありまして、其意のある所は唯だ社會百般の一分子たる宗教を採ると云ふやうなことでなくして、大陸の文明全體を日本に御採用になる所の大典儀式が行はれたと、斯う觀なければならぬと思ふのであります。

それは日本書紀には十四年となつて居りますけれども、考證しますと六年の方が正しいやうであります。而して六年にさう云ふ儀式が行はれたのは何から出て來たのかと云ひますと、推古帝が御卽位になり太子が攝政に御成り遊ばすと同時に三寶興隆の詔勅が出ました。三寶興隆と云ふことは今日の人が書紀で見ると、單に佛法を弘める詔勅と云ふやうに考へて一向感じが薄いけれども、あの三寶興隆の詔勅と云ふものは非常な大事件であります。私共は覺がありますが、御維新と同時に五箇條の御誓文が發表になり、萬國交際と云ふことを拜聽致したときには實に驚きました。私共其時には日本が魔國になつて

了ふのかと云ふ様な感じがした。其れは何故かと云ふと、嘉永六年以來國是の問題と云ふものが定まらずに居りましたけれども、併し大勢は皆保守主義であつて、攘夷論が多かつたのである。德川政府に代つて薩長土の雄藩が出て政權を執るやうになつたならば必ず攘夷が行はれるだらうと思つて待つて居つたのである。所が豈圖らんや、將軍が政治を御返上すると同時に萬國交際となつた。實に驚いた。今推古朝の三寶興隆の詔勅と云ふものは、其本を考へると、欽明天皇十三年に百濟國より初めて佛法が渡つた。渡つたけれどもこれが大問題の種になつたのであります。丁度今申した通り、日本が開國をするか攘夷をするかと云ふ問題が嘉永六年から明治元年まで決定せずにあつて、其れが御維新と同時に決した、決したけれども反對に決したと同樣で、欽明天皇十三年からの大問題が定まらずにあつた。定まらずにあつた所が、推古天皇の時に至つて三寶興隆の詔勅が出た。であるから、三寶興隆の詔勅は今日讀んで見ると何等の感じもないが、あの時代にあつては非常な大英斷であつたのであります。要するに明治四十六年間の歷史の中心は憲法である。其因つて起る端緒は五箇條の御誓文である。五箇條の御誓文の淵源する所は嘉永六年に亞米利加の黑船が來た時にあるのであります。推古朝の歷史で言へば、其中心は六年に行はれた聖德天皇の講經である。其講經の起る本は三寶興隆の詔勅である。其詔勅の淵源する處は欽明天皇十三年に百濟國から佛法を献上したことである。佛法を献上したけれども御用ひなさることが出來ないで之を稻目大臣に御預けになつた。御預けになつて何うなるかと云ふ問題が決せずに居つた

丈が、推古天皇が御即位になつてから決して了つた。であるから私は推古朝の文明史と明治の文明史と對照するといろ〳〵の趣味が出て來て愉快に感ずるのであります。けれども餘計なことは申さないで此箇條は其れ丈にして置きます。

第二　聖德太子講經の顚末

右申した樣な具合でございまして、推古朝の文明史に於ては太子の講經と云ふものが非常な大典でございます。其事は書紀にも書いてありますけれども、書紀より外の本を見ると大典であつたと云ふことが思ひやられます。いつ其講經をなされたかと云ふと、推古朝六年四月の十五日、十六日、十七日此三日間であります。此三日間天皇の勅命に依つて太子が勝鬘經を御講じなさつた。是れは丁度佛法が日本に渡りまして四十餘年間の問題が決定して而もそれが事實になつて現はれた時と言はなければなりませぬ。が、玆にいろ〳〵の不審がある。第一太子が如何に賢明で在はしましても、酒は酒屋、餅は餅屋と云ふことがある。それで天皇からして太子に僧侶の爲すべき講經の勅命が下つたと云ふのが抑々不審である。又太子が之を甘んじて御請けなさつたと云ふことも疑が容れられる。全體此時に慧慈、惠聰と云ふやうな太子に御指南をした僧侶が來て居つたから僧侶に御讓り遊ばしさうなものである。然るに天皇の勅命が太子に下つて、太子も亦何等の御辭退なく御請けになつた。而も其時に僧服を召して講經をなされた。是れが一つの疑問である。前にも申上げました通りに、天皇を初め皇族方から群臣百官公民に至る

まで悉く列席されたのでありますが、どの本を見ても僧侶が列席したと云ふことが見えない。僧侶が講經をしなければならぬのに、講經どころではない。傍聽席に居つたと云ふやうなことも見えない。居つたのかも知れぬけれども書物には見えない。僧侶と云ふものは殆ど其席に於ては隱れ人になつて居る。是れが抑々特例の一であります。此太子の講經は殆ど日本に於ける宗教の講釋の初と云ふても宜しい、演說の初と云つても宜しい、說教の初と云つても宜しい。それが勅命に依つて公然開かれまして、而も攝政の位に在しまする太子がなさつた。命じた御方は天皇である。命を請けた御方は攝政の太子である其の場處は宮中である。聽いた者は皇族百官群臣より下は公民に至るまで拜聽して居る。是れが日本の佛教の開ける端緒でありますが、其場處に宗教家が居ない。卽ち宗教專門の人は隱れ人になつて了つた是れが大に參考になりますので、後に申上げます事につき考へて置かなければならぬ點であります。

それから又經文と云ふものは澤山あります。五千餘卷とも或は七千餘卷とも云つて、藏經の編方に依つて違ひますけれども、孰れにしても澤山の經文がある其の中から、特に太子は勝鬘經と云ふものを採られた。其外に法華經と維摩經を採られたけれども、公然なる大典として御儀式の中で御講じになつたのは勝鬘經であります。何故に幾千と云ふ經文の中から特に勝鬘經を擇ばれたか。是れが宜いといふ鑑定が何處で付いたものであるか。非凡の御方であつたから生れながらにして知つてござつたと云へば其れ切でありますけれども、普通の人間として考へたならば、何うしてこの選擇が付いたものであらうかと

いふ疑問があります。

併し兎に角一應之を解釋しますといふと、是れは定めし太子の御側に居つた慧慈、惠聰と云ふやうな人が御指揮を申上げたでありませう。併し誰が御指南を申上げたにせよ、兎に角太子が勝鬘、法華、維摩の三部を採り、自ら僧侶の姿をして之を御講じなさつたのは、日本の佛教と云ふものは必ずしも印度風を學ばぬ、日本は日本の國風に合する所のものでなければならぬといふ御見識に出たものと見えます。凡て日本は儒教を採つても日本の儒教とする。佛教を採つても印度の佛教として用ひないで日本の佛教として用ひる。例へば漢文に訓點を施したのは日本の文章である。其通りに印度佛教を日本佛教としてからに太子が特權で御取扱ひなさつたと云はなければならぬ。印度佛教と日本佛教と何う云ふ點に違ひがあるかと云ふと、先づ一言で申すと、印度の佛教を大に別けると小乘佛教と大乘佛教と云ふ者になる。其中で前に申す通り勝鬘、法華、維摩の三部を選擇なさつた。この勝鬘經と云ふのは何う云ふ經文であるかと云ふと、勝鬘と云ふのは婦人の名である。勝鬘夫人と云ふのがあつて、波斯匿王の娘でありますが、この勝鬘夫人が釋迦の前へ出て自分の信仰を告白したと云つても宜いが、大乘佛教に對する自分の見解即ち悟つた所を述べられた。それを釋迦が印可證明した。そこで釋迦の說となつて居りますけれども、實は勝鬘夫人の說であります。それから法華經と云ふのは小乘に比較して大乘の優れたことを顯はしたものである。維摩經は維摩と云ふ居士即ち俗人が說いたもので、而も大乘の佛教を論じてある。勝鬘

經は婦人の說いた御經、維摩經は僧侶でない俗人の說いた御經、法華經は佛敎中の殊に至極の眞理を顯はした御經である、大乘の極意を顯はした御經である。太子は此三部を擇んで、日本の佛敎は大乘でなければいかぬと云ふので大乘佛敎を用ひ、同時に日本の佛敎は僧俗の隔てを認めぬ。御自身が全體俗人であつて僧侶の爲すことをして、所謂僧俗の境堺を破ると云ふ態度を取つて居られる。さうして其時の御發起人の推古天皇は女帝である。女帝が御發起であるから婦人の說いた勝鬘經が最も適切である。そこで日本の佛敎は男女の區別も認めぬ。僧俗の區別も認めぬ。其處に大乘の眞意と云ふものがある。法華經に「資生產業、皆是佛道」と云ふ語があつて、殖產興業を力めて世渡りをする。世渡りをしても皆是佛道で、自分が實相の理を悟つて而して世渡りのため種々俗事をなして居ればそれで宜い、國の爲め社會の爲めを圖るのが取りも直さず佛敎である。卽ち太子が國家の爲めに佛敎を御用ひなさるのはさう云ふ精神から來たのでありますから、そこで殊に此三部の御經を擇んで或は講じ或は註釋を御書きなさつたのであります。男女の區別を認めぬと云ふことに付ても面白い事情があります。全體日本で僧侶の出來初めは女である。敏達天皇の時に三人の女があつて出家をした、出家をしたけれども、どうも日本に居つては本當の戒法が守れないから佛敎の渡つた本國に行つて修行して來たいと云ふことを朝廷に願出た。そこで朝廷から向ふへ交涉になつて遂に御許しになつて百濟國へ行つた。此三人の行つたのが私は抑々日本の留學生の嚆矢であると思ふ。今日盛に文部省から留學生を出す。昔で云へば奈良朝から平安

朝時代にも大層澤山に留學生が行つたけれども、其留學生の端緒を此三人が開いたのではなからうかと思ふ。さう云ふ譯で三人の女が百濟へ行つて、さうして戻つて來ると十一人の弟子が出來たが、其十一人の中で十人までは女である。男は僅一人である。そこで聖德太子の時分には寺があつても殆んど半分は尼寺であつた。是れも日本の特例の一つとしなければなりませぬが、兎に角太子が推古天皇の勅命を奉じて三部の經文を御擇びになつたのはさう云ふ事情であります。

そこで支那の方の歷史に付て考へて見ると斯ふ云ふことが分るのです。太子は非常に梁武帝を信じて居られた。太子が勝鬘經の講釋をなさつたと云ふ如きも全く梁武帝を學んでござる結果である。全體日本に佛敎が渡つたのは支那から來たのである。然るに僧侶が百濟や高麗から來て居るから佛敎が三韓から來たと云ふ。成程人間は多く三韓から來て居るけれども、推古天皇の時の佛法は、支那から半分來て居ると謂つてよい。司馬達等と云ふ人が繼體天皇の時に來て居つたと云ふとは著しい事實である。それのみならず今云ふ三人の女は皆梁朝から來て居つた歸化人の子である。其故にあの時代に御說きになる太子の佛法と云ふものは、印度から支那に來た佛法が兩つに分かれて、半分は三韓を經由して來たものであるが後の半分は支那の南方から直接に來たのである。其であるから太子の私淑してござる所は支那の本國で殊に梁武帝である。それで太子が勝鬘經の講釋をなさつたのは如何にも例のないおかしいことの樣であるけれども、根を堀つて地に入ると是れは梁武帝に倣つてござるのです。梁武帝が自分の建て

ました所の同泰寺と云ふ寺に行きまして、涅槃經の講釋を七日間やられた。其時に三大法師と云つて自分の師範と頼んだ所の偉い僧が三人あつた。智藏、僧妥、法雲と云ふ三人があつた。けれども其時に梁武帝は其自分の師匠たる所の三人を皆講座の下に据へて置いてやつた。今太子が自ら僧侶になり代はつて御經の講釋をなさつたのは卽ち梁武帝に倣つたのである。但し梁武帝の講じたのは涅槃經である。太子は勝鬘經の講釋をなさつた。それは何うかと云ふと、御發起人たる推古帝が女帝であるから勝鬘經を擇んだのである。それも梁武帝から來て居る。梁武帝が或時三大法師の中の僧妥をして宮中に於て勝鬘經の講釋をなさしめたことがある。さう云ふ例があるから勝鬘經と云ふ御經を御擇びなさつたのも、又太子自ら僧侶に擬して講經をなさつた如きも皆梁武帝から出て居るのであります。其時代の日本は歐羅巴と云ふものゝ關係は無論無し、始終文武の中の文と云ふものは大陸を倣つた。大陸を模擬すると云ふ風でありましたから、大陸でも殊に梁武帝は並ならぬ人であつたと云ふことは洵に疑はれぬ事實であらうと思ひます。そこで太子が講經をなさつたと云ふことは大に意味あることになり、太子自ら之を御請けなさつたこと、其經文を御擇びなさつたと云ふ樣なことに付ても洵に疑が晴れたやうな氣持が致します。

是れに就いて申すことはまだ澤山ありますけれども、餘り長くなりますから是れで止めて次に移ります。

第三　日本佛教の特例、

（一）皇室の御歸依に付ての特例

（二）國家の政治上に付ての特例

（三）教理史の特例

先づ今日の會の性質から考へましても、（一）（二）の兩つは國民として知つて置かなければならぬと思ふ。推古朝の歴史の基礎を成して居るのであります。推古朝に佛教の開けた端緒が、今申す通り殆ど宗教家は關せずして國の政を爲す所の爲政家がいろ〳〵な事をして居る。政權を握る所の大君、並に攝政の位に在る太子が其端緒を開かれた。初佛教を寄來した人は百濟の聖明王である。受取つた御方は欽明天皇である。さうして誰に御預けになつたかと云ふと、時の大臣の蘇我稻目に御預けになつた。殆ど宗教家は何もせぬ。日本と云ふ國家を双肩に擔つて居る所の人ばかり之をやつて居る。斯う云ふ例は殆ど他の國に於て見えない。政治と宗教とは相關係して居るけれども、日本ほど宗教家が隱れ人となつて爲政家の手に依つて宗教が成立つた歴史と云ふものは少い。

（一）皇室の御歸依に付ての特例　先づ此事をお話するには外の國のことから申さなければならぬが、西洋の事は私は存じませぬ。存じませぬのみならず、縱し知つて居つても西洋のは例にはなるまいと思

ふ。そこで東洋の方に付て申しますが、東洋では印度と支那との此兩國に比較すると宗教史に於て實に日本は特色を有つて居る。何ふ云ふ特色を有つて居るかと云ふと、印度に於ては殊に宗教の統一が出來なかつた。印度ほど宗教思想の紊亂した國はない。其反對に又日本と云ふ國は不思議に宗教の統一が出來た。而して國家の政治上の統一と云ふことは小學校の生徒に至るまで知つて居るが、宗教の統一と云ふことは、一向誰も言はぬやうに思ひます。けれども日本の歷史は實に能く宗教の統一が出來て居る。德川の中世以後に其統一が缺けて來たけれども、其以前で申しますと、一千數百年の間は宗教上の統一が出來て居つたといふことが言へるのであります。神儒佛三教と云ふことを申して居るが、實に此神儒佛の三教は融和と云ふよりも全く一つになつてしまつた。少しも其間に軋轢がない。さうして其端緒は推古朝の聖德太子が爲して居るのであります。恰も佛教が中心に在つて神道と儒教とを兩方に抱いて居る樣な具合によく融和して居つた。

それから支那は何うであるかと云へば、支那も亦宗教の統一が出來てゐない。支那の佛教家で言ふと印度は外道があつたが支那は外道がなくつて大變宜いと言ふけれども決して然うでない。宗教史を見ると第一に佛教と道教と云ふものが常に衝突して居る。それが唐朝の末になると儒教と亦衝突して卽ち儒道佛の三教が始終衝突して居る。殊に支那では三武一宗の難と云ふことがある。北魏の太武帝、北周の武帝、唐の武帝と、それから五代の時の世宗と、之を三武一宗と云ふのであるが、時の君主が極端なる

排佛をしたことがある。それを三武一宗の難と云ふ。是れは君主が排佛をしたのであるけれども、其實は道教と佛教の衝突である。何うして道教と佛教が衝突したかと云ふと、國の宗教上の統一が出來てゐないからである。佛教を信仰して居る君主が出た時は佛教の勢力があるけれども、道教を信ずる君主が出た時には道教の力で佛教を排する。大隈さんが言はれましたが、御維新の時の排佛と云ふのは何も政治が排したのではない、神儒佛三道の衝突である、あの時分に奔走した人々は皆佛教の信仰はない、主として儒教を奉じて居つた人であるから、卽ち宗教の軋轢であつたと云ふことを申されましたが、眞に然うでありませう。支那でも排佛と云ふことがある。宗教の統一が出來ませんだから君主の信仰が時々變はる。君主の信仰が變はると宗教も變る。印度も亦然うである。いろ〳〵の宗教があるから、君主の信仰が變はると自分の信ずる宗教を採り、信ぜない宗教を抑へる。さう云ふことになります。

然るに我が日本に於ては其れがない。日本では推古天皇の朝に佛教が起りましてから今日に至る迄、個人の排佛はありましても、國家の排佛と云ふことはない。と云ふのは卽ち皇室が統一連綿たると同時に御信仰が連綿として居るからである。是れは國家に宗教の統一と云ふものが出來て居つた結果である日本には排佛の皇帝がない。日本は皇統一系で、國家が形の上で統一が出來て居る。それから信仰の上で思想上の統一が出來て居る。皇統一系で政治上の統一が出來て居ると同時に、もう一つ精神上の信仰の統一が出來て居つたことは、國民思想の統一と云ふことに付て餘程關係があつたことと思はれる。

其實例を擧げますと、推古天皇以後明治天皇まで御歴代九十五帝でありますが、此九十五帝の中に於て、天皇が法體と御成り遊ばした、卽ち生きながら出家の戒を受けて僧侶の風に御成り遊ばした御方が三十五帝ある。それは年月も皆分つて居ります。其外に北朝の光明天皇と後龜山天皇を加へると三十七帝になります。既に天皇が然うであらせられるから、皇后陛下並に皇子方を尋ねて見ると御出家なされた御方は澤山ある。一寸私が調べた丈でも皇后陛下が七十四名、皇子方で法親王に御成りになつた御方が二百五十幾名ある。さう云ふ風に皇室の御方々が佛法に御歸依になられましたから、臣下としては北條でも足利でも、將軍とか執權職になつた人々で坊主になつた者が澤山ある。將軍が坊主になるから地方の武士が矢張り坊主になる。上杉謙信とか武田信玄とか、みなクリ〳〵坊主で袈裟法衣を着て戰場に行くのを得意として居る。今日から考へると滑稽のやうであるけれども、其頃には何々僧正とか云つて袈裟を掛けて非常に得意になつて居た。何でも時代が變はると可笑しいやうなことでも可笑しくない。却て誇りとした。あれ程の豪傑でも皆さうである。日本で斯う云ふ風なことがあつたのは卽ち宗教の統一が出來て居つて、皇室の御信仰が變はらぬからである。

（二）國家の政治上に付ての特例　政治上に付ては更に特例を有つて居ります。先づ印度に付いて見ますと、佛教は非國家主義であると謂つてよいと思ふ、獨り佛教が非國家主義なのではない、凡そ宗教と云ふものゝ眞面目が非國民主義のものであるのです。民族的宗教卽ち猶太教とが支那の道教又は日本の

神道の如きは其國民に限り信ずる樣に出來て居るけれども、佛教や基督教の如きは何處の國民の爲めに作つたと云ふものでない。たとへは宇宙の大問題を研究するのは哲學である故に哲學は何處の國の人でも之れを研究する。それと同じで、宗教と云ふものは宇宙の大眞理を基礎として成立せしものでなければならぬ。故に何處の國の人は信ずべきもの、何處の國の人は信ずべきものでないと云ふ樣に國を以て隔つべき譯のものでない。由つて宗教の根本義とも云ふべき點は先づ非國家主義である。と云つても宜い。故に釋迦は自分の國を捨てゝ政治に關係しない。其弟子でも政治に關係した人はない。政治に關係しないから僧正とか何とか云ふやうな位階を貰ふと云ふこともない。出家と云ふから家を出る、世俗を離れる、實に超世間である。既に超世間のものであるから非國家主義と云ふ語がおかしく聞えるか知らぬけれども、世俗を全く脫却してしまふ所がなければならぬ。出家と云ふ語は其れから來て居る。それで印度では政治家が宗教を利用するとか何とか云ふことはない。宗教を信仰すると云ふことはあるけれども、政治上に宗教を應用するとか、或は宗教家が政治上から助けを被るとか云ふ樣な、さう云ふ卑屈な精神は有つて居らない。全く世俗以外に超然として自ら信ずる所を行ふと云ふのが出家の態度である。

印度佛教の態度は先づ其處にある。支那に於ては何うかと云ふと、支那も初は印度のやうな風であつた。一例を擧げますと、彼の廬山の慧遠法師などは全くさう云ふ風であつた。當時の桓玄と云ふ人があ

つて、僧侶と雖も國王を拜さなければならぬと云ふことを唱へた。桓玄以前は、僧侶と云ふものは國王を拜さぬ。卽ち敬禮をせぬと云ふ制度であつたが、桓玄が、其れはいかぬ、僧侶と雖も一般の俗人と同じ樣に王者に向つて敬禮をさせると云ふ制度を立てやうとした。所が慧遠法師がそれに反對した。反對して「沙門不敬王者論」と云ふ書を著はした。それに何う云ふてあるかと云ふと「袈裟非二朝宗之服一鉢盂非二廟廊之器一沙門處外之人不レ應レ致二敬王者一」と蓋し袈裟法衣と云ふものは世間を離れた看板である。官服ではない。僧侶の持つて居る鉢と云ふものは自分が出て貰つて來る器械である。王者と云ふものは世間の王樣である、卽ち國家の君主である。然るに世間とか國家といふものを離れて仕舞つた出世間者が世間の法則に依つて世間の人と同樣に王者を拜する謂れはないといふのである。是れは今日日本の人から見ると實に驚くでありませう。慧遠は廬山に登つて三十年の間山を下らぬ人である實に世外の人であつた、由てこんなことがいへたものだ。そこで桓玄ほどの豪傑でも何とも言ふことが出來ないで遂に其制を廢しました。時に晉の時代にはさう云ふ主義が行はれて居りましたけれども、其後漸々として僧侶は俗化して了ひました。けれども兎に角支那はさう云ふ風に、初は徐程印度風が行はれて居りました。

日本は何うかと云ひますと、日本の佛敎は初から政治家が興した。さうして何の爲めに興したかと云ふと畢竟國家を治める爲めである。國家と云ふことが第一の問題になつて居る。國家を第一の問題とし

て佛法を採用されたと云ふことは抑々百濟の國王が欽明天皇に奉つた所の上表文に其れが見えて居る。鎭護國家と云ふ精神が一番重んぜられて居る。それで利益の有る無いと云ふことは別問題にしましても聖德太子が第一に四天王寺を御造りになつてから其理想が段々發達して、其結果聖武天皇の時代に至つて國分寺が出來た。國分寺は之を金光明四天王護國寺と云ふ。略していへば護國寺といふ意味である。此の外また宮中に於ては仁王會、最勝會と云ふことがある。共に年々行はれる所の大典であつて、鎭護國家の御祈禱である。それから東大寺と云ふのが日本中の國分寺の總本山として建立された。皆是れ鎭護國家と云ふ精神から起つたことである。斯う云ふ風に國家と云ふ問題が本になつて佛法が採用されたと云ふことは他に例がない。

更に其著しき例を擧げますと仁王經と金光經です。是れは四天王と云ふ神々が現れて國家を護つて呉れると云ふのです。此御經は支那では餘り用ひられて居ないのですが、日本に於ましては殊に齊明天皇以後と云ふ者は盛に用ひられました。宮中の仁王會と云ふのは仁王經を講ずる會、最勝會と云ふのは金光經を講ずる會である。言ひかへると國家の安寧を祈禱する所の會であります。國々に置かれました所の國分寺も其爲に建立されたのであります。假に日本書紀を御覽になつたらどれ程此兩つのお經を朝廷が御信仰になつたかと云ふことが分る。やはり是れが國家問題から來て居るのです。さう云ふ具合に國家と實に離れられぬ關係になつたと云ふことが日本佛教の特色であります。それでありますから僧侶

と云ふものが一番先に留學しましたのは敏達天皇の時に行つた禪藏、善信、惠善と云ふ三人の尼僧でありますが、それが朝廷の命に依つて行つたのであります。其後大化革新以後になると續々行つた。奈良朝の傳教、弘法なども今日の所謂留學生と同じことであつて、費用は悉く朝廷から出した。准官吏です。さうして朝廷の御用で行くのですから傳教でも弘法でも歸朝すると皆朝廷に報告して、自分の經歷を悉く申上げる。傳來せし書籍類は皆朝廷に奉納するのが例である。全く朝廷の命を奉じて僧侶が留學をした。であるから政治と佛教と密着して居つたと云ふことが分る。然るに鎌倉時代に至りまして、法然上人とか、親鸞上人とか日蓮上人と云ふやうな人は全く政治を離れてやつた。獨立でやつた。少しも朝廷の保護とか幕府の保護と云ふことを受けて居ない。保護どころではない、寧ろ幾らか妨害されて其れと鬪つてやつて居る。けれども其時代に臨濟派と云ふ方では非常に保護を得て居る。鎌倉幕府とか足利幕府の保護を得て居る。殆ど奈良朝時代と同じ樣な保護を得て居る。建長寺であらうが、圓覺寺であらうが、嵯峨の天龍寺であらうが皆幕府の保護を得て居る。要するに是れが國の政治と宗教と一致して居る證據でてあります。併し若し之を別けて言ひましたならば、奈良朝時代の宗教は政教一致であります。聖武天皇などは奈良の大佛を造つて御祈禱なされるのを政治上一つの仕事と心得てござつた位である。奈良朝の佛教は政教一致であります。それが平安朝では一寸變はつて居る。平安朝は奈良朝の政教一致に懲りて政教分離でありました。政教分離でありましたけれども、政教各立して相助けなければならぬ

と云ふのであります。卽ち奈良朝の佛教は政教一致であつたが平安朝の佛教は政教相資である。斯う言へるのであります。

第三　教理史の特例に付て

教理史で申しますと、推古朝の佛教が主になつて居ります。また佛教を大に別けると先づ小乘と大乘とになるのでありまして、而して印度の佛教は小乘が重もである。玄奘三藏が印度に行つたのは釋迦滅後千二三百年を過ぎてからである、大乘佛教が起つてからであるが、それでも、玄奘の西域記を見ますと七十餘箇國を巡廻しましたが、其中で大乘を學んで居る國が十五國であつた。小乘を學んで居る國が四十一國、大小二乘を兼學する所の國が十五國となつて居ります。此の統計から見ましても印度と云ふ國は矢張り小乘が盛であつたと云ふことが分ります。支那は何うであるかと申しますと、支那は大乘が盛であつた。けれども支那は純大乘と云ふ譯に往きませぬ。やはり小乘が、六朝時代には這入つて居ります。

所が我が日本では何うかと言ひますと、前に申した通り、太子が既に勝鬘經、法華經、維摩經と云ふ三部を撰擇して之れが日本の佛教だと云ふやうに興されましたから、日本の佛教は純大乘佛教でありまして。昔から佛教家が日本は大乘有緣の土地であると言つたのは其れである。純大乘でありましたのが、それが奈良朝の盛な時分には、奈良の六宗と云つて三論、成實、法相、俱舍、華嚴、律と云ふ六宗があ

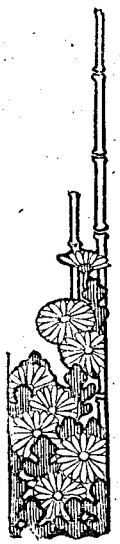
つた。其六つの中で大乘小乘に別けることが出來るのです。さうして成實は大乘、俱舍は小乘である。けれども成實は三論に屬し俱舍は法相に屬すると云ふのが朝廷の規則であつて獨立はしない。日本には小乘の名はあるけれども未だ小乘の寺は、一箇寺も造つたことがない、又小乘の僧侶がない。唯々學問として研究する者があるに止まつて、宗教としては獨立しなかつた。けれども、それでさへも奈良の佛教は小乘にかぶれて居ると云ふので傳教大師が改革をした。さう云ふ譯でありまして、日本の佛教は小乘でなくして純大乘佛教であると云ふのが特色であります。

更に其大乘の中を別けて申します。皆樣は所謂商賣違ひでありますから如何に大家であられても斯う云ふことは不慣れで、大乘小乘の區別が如何かと思ひますが、是れはなか〳〵佛教家でも簡單に區別して呉れと云はれると困るのです。けれども先づ一口に言へば、大乘と云ふのは實に高尚なる微妙なる哲理を包含して居る。假に斯うすると、其哲理を包含して居るものだと云ふ理論は日本よりも支那が盛である。日本では傳教弘法ほどの人でも支那以上に高尚なる理論を立てたとは言へぬ。支那の理論を持つて來て少々手入れをした位なものである。

それでは日本佛法の特色は何處にあるかと云ふと、其高尚なる理論を以て更に宗教的實際的に應用して來たのである。傳教弘法の變はつた處は何處にあるかと云ふと、天台眞言と云ふけれども、平安朝に於ては朝廷の信仰も社會の信仰も密教の方面で盛になつたと言つても宜い。密教と云ふものは非常に高

尚なる哲理に基礎を置いて居るけれども、はやく言ふと宗教的に、佛樣を拜む、儀式を作つたものと思つてもよいほどのものである。つまり高尚なる哲理が宗教的に運用せられて居ると謂はなければならぬ密教と云ふものは其端緒は印度に開かれたに違ひないが、密教の盛なることは世界萬國中日本の樣に盛な國はない。支那などに於ては僅に六七十年以內のことである。而も一つの宗派として獨立しない。日本では傳教弘法以後鎌倉までは密教で佛法を持つて居つた。今日と雖も密教はなか〳〵盛んである。密教は何う云ふものかと云ふと、一口に言へば、高尚なる大乘佛教の哲理が宗教的方面に運用されたとか、應用されたとか、活用されたと云つて宜からうと思ふ。それが更に鎌倉時代になると玆に法然上人に依つて念佛宗と云ふものが出來た、南無阿彌陀佛の宗旨が起つた。又道元禪師に依つて禪宗が起り、日蓮上人に依つて日蓮宗が起つた。結局鎌倉時代の新佛教と云ふものは坐禪主義の宗教、念佛主義の宗教、題目主義の宗教と此三つであると謂はなければならぬが、此三者共に高尚なる理窟を以て得意とするものではない。支那には理窟を以て得意とする宗旨が起つたけれども、日本には理窟主義即ち理窟を以て自慢して居ると云ふ宗旨は起らない。理窟より。寧ろ實際的に精神を修養するとか精神を安慰するとか、若くは道德の方面を實行するとか、兎に角實際の方に運用し活用した宗旨である。それが即ち密教である。

そこで教理の發展上から申しますと、日本の佛教は小乘的にあらずして大乘的である。大乘的と云ふ

中でも理論の方面よりも實際の方面である。理窟を捏ねると云ふよりも寧ろ實際的に而も普及を旨として居る。支那の方は私は判然したことは分りませぬけれども、支那へ行つた人の話を聞くと誰でも言ひます。支那は佛教が非常に繁昌したけれども下層社會の信仰と云ふものは私は疑問であると思ふ。佛教は主として中流以上にある様である。下層社會の信仰と云ふものは道教である。下層社會の道教の信仰が時々上流から爆發して來たのが卽ち前に申した三武一宗の難であつた。それが清朝になつてから太上感應篇といふものが非常に用ひられた。恰も日本の教育勅語以上のやうに用ひられた。太上感應篇は道教を基礎となし佛教と儒教とを一つにした様なものであります。要するに支那の佛教と云ふものは餘り理窟に過ぎて、下層の信仰は寧ろ道教である。日本は幸に念佛主義とか題目主義と云ふやうな者が出ましたから上流から下層社會に至るまで佛教で一致した。上は皇室から下層の人民まで佛教的信仰で統一することが出來ました。是れは實に日本佛教の信仰上に於ける特例であらうと思ひます。而して其信仰の統一が德川の末葉から明治に掛けて段々破壞して來て、今日では統一が出來て居るとは言へぬやうになつて居る。宗教の統一と云ふことは、國民思想上、餘程大切なものであらうと思ひます。例せば私の知つて居る地方で申すと斯う云ふ所がある。數百戸の信徒が有つて一宗一派一寺であるが、さう云ふ地方では萬事が非常に纏まりが宜い。何もかも異論が起らない。然るに宗派が二つにも三つにも分れて居ると、それが凡ての事に影響して物事の一致すると云ふことがむづかしい傾向がある。同じ宗旨で派が

違ふと一致しにくい。甲が斯う言へば乙が反對すると云ふやうな事實が時々ある。それに就いて考へますと、日本で昔宗教の統一が出來て居つたと云ふことは國民思想の統一上餘程都合が好かつたと思ふのでありますが、今日ではそれが時勢の成行で統一が出來て居ない。是れは時勢の成行のみならず、一つは佛教家にも其れだけの罪があるでせうが、いづれにしても今日宗教上の統一が缺て居ると云ふことは洵に私は遺憾に思ふのであります。甚だ長く申上げまして御迷惑でございましたらう。